

わたしも 一筆

鶴田での少年時代の
思い出を彫り続ける



藤田 健次
(版画家・八戸市在住)

一九三九年、鶴田町生まれ。県立五所川原高等学校卒業後、新聞記者を経て公共職業安定所勤務。一九九九年、八戸公共職業安定所所長を最後に公務員生活を終了。この間、版画家、漫画家、エッセイストとして活躍。



▶三月二日(日) 鶴田町子どもフエスタで、子どもたちに木版画のカレンダー作りの指導をする藤田さん。

わたしの版画のルーツは、中学三年の冬までさかのぼる。わたしは中学校を卒業したら、集団就職で東京へ行く予定だった。その就職まであと二か月と迫った一月の半ば、わたしはこたつに入って小さな版画を彫っていた。彫っていたのは「謹賀新年」の四文字。どこから届いた年賀状の文字が気に入って、その文字を版木に写し取り彫っていたのだ。

もう年賀状の時期は終わっていた。しかし、就職まで何をしたらいいか分からず、翌年の年賀状に使う当てもない文字を、ただ自分の心を鎮めるために彫っていた。クラスの友達も、高校受験のため夏のうちから補習授業を受けていよいよ最後の追い込みに入っていた。しかしわたしは何もするこ

とがない。卒業したら荷物をまとめて東京へ行くだけである。暗く重い雲の垂れ込めた中学三年の冬だった。

その日もわたしは彫刻刀を動かしていた。そこへひょっこり、クラス担任の今東悦先生が来たのだ。風もなく暖かい夜だった。

今先生は、青い背広に襟巻きひとつでやって来た。そして、わたしの両親に向かって「健次とは、高等学校さやるべし」と言ったのだ。両親はそれに同意し、わたしは急ぎよ高校を受験することになったのである。

あとで分かったことだが、当時鶴田中学校の教頭をしておられた竹浪正静先生が、わたしの将来を心配し、今先生を差し向けてくださったとのことだった。わたしは

参考書を一冊買い、それから独りで自宅で勉強した。県立五所川原高等学校に合格したときは嬉しかった。わたしは高校に入ったおかげで、新聞記者として就職することができた。やがて、その新聞社の先輩記者だった方が書いた文にわたしが版画を彫った。それが「絵本モッコ」だった。鶴田でも昔からうたわれている子守唄を題材にしたその絵本は、全国紙に「土着の挑戦」と大きく報道された。当時三十一歳、わたしの版画活動のスタートであった。

あの中学三年の冬、裸電球の下で、こたつに入りながら使った彫刻刀は、今も大切に持っている。わたしは「謹賀新年」の四文字を削った。今はすっかり黄ばんでぼろぼろになった紙をそっと取り出

してみる。「ちくしょう、ちくしょう」と、貧乏を悔しがりながら板を削ったあの日のことは忘れられない。そして、高校へ進ませてくれた中学校の先生や父母、それを支えてくれた兄や姉たちのことも忘れない。あの夜、今先生がもし来なかったら、わたしの人生はどんな歩みをしていただろう。版画は彫っていたらどうが。

わたしは彫刻刀を動かす。思いはいつの間にか、あの中学三年の冬にたどり着く。鶴田の冬を思い、鶴田の版画を、わたしは今日も彫る。

※著書は「絵本モッコ」「絵本八の太郎」「絵本津軽のわらべうた」「うたえほん夕焼け空」「看護婦のオヤジがんばる」ほか多数。